



内科診断学 第4版

福井 次矢, 奈良 信雄,
松村 正巳 編

[評者]

田中 雄二郎

東京科学大学学長

●B5 頁1104 2024年03月

定価: 11,000 円 (本体 10,000 円+税 10%)

[ISBN978-4-260-05315-0] 医学書院刊



8年ぶりに改訂された『内科診断学 第4版』は、学生や研修医のみならず、すべての医師の学び直しのためにもお薦めしたいと思います。

学生たちには、患者さんは「くも膜下出血できました」とは言わず、「頭が痛くて何とかしてほしい」「こんな頭痛は経験したことがない」「まるで頭をハンマーで殴られたようだ」と言ってくるのだと話します。

また、「ハンマーで殴られたような頭痛」だからといって必ずしもくも膜下出血とは限らず、他の病気も鑑別診断に挙げなければ、思わぬ間違いを悔やむことになると話します。

学生は言われてみればその通りだとすぐに理解しますが、ではどうやって勉強するのかということになると、現実には症状を生成系AIに入力して答えを待つ、もうそういう時代になっています。

しかし、診断とは、本来丁寧な医療面接と身体診察、そしてそこから必要とされる検査や画像検査の所見を総合して判断する知的な行為です。医療面接プラスAIだけでは誤った診断になることは容易に想像できることです。

ではどうやってこのプロセスを勉強すればよいのか。診断学の教科書がその意味を持ちます。以前からわが国には優れた内科

診断学の教科書がありました。ベテランの人たちは学生時代に身体診察なら武内重五郎先生の『内科診断学』、症候学なら吉利和先生の『内科診断学』を使って学んだものでした。しかし、残念ながらこれらの名著は10年以上改訂されていません。

そのようななか、内科診断学を学ぶほとんど唯一の現役の診断学の教科書と言ってよい本書が改訂されました。もともと定評のある症候学に加えて、症例が第3版の26例から107例に大幅に増えていることが特徴です。

今回は増えた症例が付録電子版に掲載されていますので、今回の改訂からは、むしろ付録電子版を主体とした使い方になるのではないかと思います。私も実際にタブレットPCから付録電子版を見ています。症例には「アナザーストーリー」という今風の記載もあり、ちょっとした隙間時間に読むと読み物を読んでいるような楽しさもあります。

最後に強調したいことは、医療面接、身体診察、症候、症例と進む前の第I章の重要性です。診断の落とし穴について経験に裏付けられた論理的な記載があり、臨床実習の医学生や研修医にとっては「転ぶ前の杖」となり、ベテランの医師にとっても新たな気づきを与えてくれるものと思います。